

中学2年生 卒業生キャリア講話

第31期卒業 岡村紘野(おかむら こうや)さん

12月8日(水)中学2年学年の時間では、二学期に連続して行ってきた「自分の価値観を疑う」というテーマと、これから中学3年にかけて学ぶ、「仕事とは何か・どんな未来を作りたいか」というテーマの架け橋となる「卒業生キャリア講話」として、31期の岡村紘野さんをお招きしました。岡村さんは松竹株式会社の映像企画部でプロデューサーとして活躍されています。山手学院中学時代から就職に至るまで、様々な困難や軋轢に遭遇してきた岡村さん。その岡村さんを現在の道に導く大きな役割を果たしたのが、続けてきた大好きな野球と「男はつらいよ」との出会いでした。



その「男はつらいよ」のいくつかのシーンをあげて岡村さんはお話をしてくださいました。たとえば「自由人」の寅さんに、甥の満男が「なぜ大学に行かなければならないのか？」を尋ねるシーン。「なぜ勉強しなければならぬのか？」は思春期の中学生なら誰でも抱える疑問です。寅さんはこう答えます。

「人間長い間生きていればいろんなことにぶつかるだろ？そんなときに俺みたいに勉強してないやつは振ったサイコロで出た目で決めるとか、そのときの気分で決めるよりしょうがない。

ところが、勉強したやつは、自分の頭できちんと筋道を立てて、こういうときはどうしたらいいかな、と考えることができるんだ。だからみんな大学に行くんじゃないか。」

(第40作「寅次郎サラダ記念日」1988年)

偏差値でも、学歴でもない、「勉強すること」の根源的な理由を語る寅さんの言葉に、生徒たちはじっと耳を傾けていました。

最後に岡村さんは、寅さんがもらったメロンを「くるまや」のみんなが寅さんの分を取り忘れて食べているのに遭遇して怒るシーン(第15作「寅次郎相合い傘」1975年)をあげて、当時の観客の中には、この寅さんに共感する人も、メロン一切れくらいでそこまで怒らなくてもいいんじゃないかと思う人もいたことをあげて次のように締めくくりました。

映画というのはその人の境遇によって同じシーンでも捉え方が異なります。スマホで一人で見ていると、他の人がどう思うか、その感情はわかりません。でも一つのシーンをみんなで見ると、隣の人が笑っていたり泣いていたります。(学校から提示されたテーマの一つである)「自分を疑う」のように、自分はこう思うけど他の人は違うかもしれない、そんな風に映画はいろんな人がいろんな見方・考え方をしていることに気づかせてくれるきっかけになるのではないかと、そんなことを僕は山田洋次監督から教えてもらいました。

今回のもう一つのテーマである「仕事」、「仕事のやりがい」に関して言えば、第50作の公開前に、会社に通のメールが届きました。それは「私の父は寅さんの大ファンです。何十年ぶりに寅さんが映画で公開されると聞き、とても喜んでおります。しかし、父は病氣と闘っており、本人には伝えておりませんが、余命が数か月。たぶん映画の公開まで間に合わないと思います。どうか父に公開より先に映画を観せてあげることにはできませんでしょうか？最後の親孝行をしてあげたいのです」というものでした。このメールを読んだスタッフはすぐに会社にかかけようと、会社も「寅さん映画というものはそんな人に寄り添う映画です。その方、そしてそのご家族に観てもらうことこそ、私たち、松竹映画なんです。すぐに届けてあげなさい」と。僕はこういう会社に入って本当によかったと思うし、これが働くことの意義なんじゃないかと思って毎日働いています。これからも世のため人のためになる作品を作っていきたいと思います。

岡村さんのお話を聞いた生徒たちからは、「もっと勉強する」「映画をもっと見る」「寅さんみたいになりたい」「松竹で仕事をしたい！」などの感想が寄せられました。

人の心につながり、人の心をつなげる仕事。映画制作の素晴らしさを実感した時間でした。

岡村さん、ありがとうございました！